

續日本歌學全書

第五編

香川景樹翁全集下卷

東京博文館

佐々木信綱編纂

香川景樹翁全集下卷

東京博文館藏版

續日本歌學全書第五編

佐々木信綱編

解題

この第五編もかゝりし書もつきていさゝういはむ。隨所師説（一名詠草奥書）の、香川景樹翁が、門人の詠艸の奥にゑるされし文どもをあつめしめて、異本おほく、いづきをいづまどとせざるべし。さるの教子さちの、得るも隨ひて寫しつゝへしものあまばあるべし。今の高崎正風翁松波遊山翁井上頼國翁をはじめ諸家の藏本、松本吟天社にて刊行せる麓の道等よりて、校へさし補ひくはへつ。されど猶もれざるも誤れるもあるべし。かるかや集の松波翁の輯められしめて、上巻の桂園派の歌をのせ、中巻の熊谷直好の文二篇、景樹翁の日記抄録をかゝりげ、下巻の景樹翁の歌づめ抄録をあぐ。この書の翁の藏板あるが、こゝび特々此卷の中にある、事をうべきはましむかむ。また上巻の歌の、翁の考へて、桂園一家及景樹翁の門弟の歌のみをえりいで載する事とあしつ。景恒翁歌集の、そが教子高橋古道翁のえらび輯めて、松波翁おくられしを、景恒翁の歌の未だ世におほや

みならでいと珍らしければ、翁の息景之ぬしと松波翁とふこひて、のせつるあり。須磨日記の、景恒翁の、いまゞ景周といはれしほど、人々と共ふ、須磨明石の浦づゝひせられしをりの道の記あり。古今集正義總論の補註、同補註論、同補註論辨の、其名此如く正義の總論おつきて、直好が補註を物せしを、八田知紀の論じ、更ふそを直好の辨せしものなり。上巻のせし正義總論と引あはせ見るべし。古今集正義序註追考の直好の著みて、古今序の正義の註おつきて論ぜし書あり。この書は景樹翁の在世のをりの著、總論補論の翁没後の著けれど、正義のついでにまゝがひて、殊さらお前後せさせつるなり。まゝ此書の直好の自筆本（松波翁藏）およりて校へ正しつ。浦の汐貝初篇の、直好の家集ふて、拾遺いま一卷あれど、こゝおんえのせず。桂の下枝の、景樹翁をはじめ門人たちの雜筆をあつめて、おさくしおまう名づけつるおまひ。以上の書ども、景樹翁全集の下巻として、いういと打うさぶく人もありぬべけれど、その第一篇の緒言おひし如く、景樹翁門下の家集歌論の書を此第五編おと思ひつるお、紙數お限ありて、亮々遺稿おのぶ草等、近世名家々集此内おのせる事となしつるあり。

附言

景樹翁の眞蹟四葉のうち、終なる短冊一葉は高崎翁の所藏にて、他の皆井上通泰氏の所

藏なり。氏の書狀に、詠草奥書の、桃澤夢宅の詠草に書き添へしものにて、夢宅自筆の家集蓬臙患藻集の中に、はさまりてありしを見出でしなり。夢宅の死去は文化七年なれば、景樹の四十三歳より以前の筆なり。三首懐紙の、景樹肥後守にうつりしより、卒去に至るまで、一年半にたらず。されば肥後守と署したる懐紙の、僅に十餘枚といひ傳ふ。殊に三首のめづらものなり。其證の、萱園(高橋正統)に遣したる消息に、「三首のトントかけ不申、同敷ならば御斷申度」云々、とあるにて知らる。長歌懐紙の、一枝に出でたる歌なり。文政元年の初夏、本所原庭なる葵園(門人僧亞元)にてよみし也。短冊の、享和元年四月、柏原氏當座の歌にて、夢宅の頼によりて認めたる也。此短冊及奥書(上卷に出でたる高崎氏所藏の短冊二枚も)の、所謂若書にて、普通世に傳ふるものとの、書風いたくたがへり。此歌筆のさが出て、四句、眞乘院雪岡が江戸へくだし、本に、寒しといはむとわりしより、春海のこれを書損といひ、小川萍流の云ひそこなひなりといひ。景樹の方人鼓聖堂の佐々木眞足の、「いはぬ」と聞きたりといひて、やかましく議論のありし歌なれば、後日の證として、桃澤氏より乞ひ受けねきつるなり。とあり。

香川景樹翁全集下巻目次

隨所師説……………九

高橋正澄が詠草お……………九

又同じ人お……………一二

同じ人の詠草お……………一五

まゝ……………二〇

水月法師が問お答ふ……………二一

白木重樹への文……………二五

同じ人の詠草お……………三〇

内山真弓への文中お……………三三

同じ人雜題百首の詠草お……………三四

並木周子の詠草お……………三六

大西吉邦の詠草お……………三七

村地延翼への答……………四二

同じ人の詠草お……………九

丸山弼の詠草お……………一三

塚村直の詠草お……………一八

僧水月の詠草お……………二〇

西郷元命の詠草お……………二五

藤木光好の詠艸お……………二八

平戸ある某の詠草お……………三二

同じ人の詠草お……………三三

林良本の問お答ふ……………三四

並木信粹の詠草お……………三七

神方升子の詠草お……………三九

淺岡泰任の詠草お……………四三

濱武鄭次郎への文……………	四五	山本嘉之の詠草お……………	四五
ある法師の詠草お……………	四六	丸山辰政の詠草お……………	四八
同じ人の詠草お……………	四九	宮坂久寛の詠草お……………	五〇
同じ人の詠草お……………	五二	大嶋直章の詠草お……………	五三
まゝ其後の詠草お……………	五六	まゝ……………	五六
同じ人への文……………	五七	樂不流の詠草お……………	五八
宮坂道子の詠草お……………	五九	巢山永清の詠草お……………	五九
賛川勝巳への文……………	六一	同じ人へ……………	六二
岡田忠保への答……………	六四	同じ人の詠草に……………	六六
菅沼斐雄への文……………	六八	名古屋人某の詠草お……………	六八
清園歌結の奥お……………	六九	明阿上人の詠草お……………	七一
まゝ……………	七二	平賀相一の詠草お……………	七四
猿田彰がもどお……………	七四	古學者の難問お答ふ……………	七五
まゝ……………	七六	まゝ……………	七七
正壽尼の詠草お……………	七七	月正が問お答ふ……………	七八

或人ヲ遣されし哉の論……………	八〇	ある人の詠草ハ……………	八一
まゝ……………	八一	まゝ……………	八二
まゝ……………	八二	杉浦盛久の詠草ハ……………	八三
琉球浦添王子の詠草ハ……………	八四	小坂道賢の詠草ハ……………	八五
内山眞弓の詠草ハ……………	九六	江戸社中點取評……………	九八
兒山紀言の詠草ハ……………	一〇六	江戸人の歌の評……………	一一二
文政六年江戸人點取評……………	一一七	稻村三羽詠草ハ……………	一二二
西郷元命の詠草ハ……………	一二七	天保八年江戸社中點取評……………	一三四
元龍が問ハ答ふ……………	一四九	とわまの説……………	一五〇
ふいさの語釋……………	一五一	をさゝけや々さの語釋……………	一五二
紅涙さぬくの説……………	一五三	鴉のうちもの考……………	一五五
紀聞……………	一五五	紀成の歌の評……………	一五八
かるのや集……………	一五九		
桂園派の歌……………	一六一	西大谷門前林泉記……………	一七一
詠甫の肖像ハ……………	一七二	日記のうち……………	一七三
	直好……………		景樹……………

歌づめ此うち……………景樹……………二二七	
景恒翁歌集……………二六五	
須磨日記……………二八九	
古今正義總論補註……………三〇一	
同 補註論……………三二三	
同 補註論辨……………三二五	
古今正義序註追考……………三三八	
浦のまほ貝……………三四九	
春歌……………三五一	夏歌……………三七六
秋歌……………三九三	冬歌……………四一二
戀歌……………四二七	雜歌……………四三五
桂の下枝……………四八一	
折々草抄……………四八一	直好への文……………四八二
長翁の詠草お……………四八三	東塙遺言抄……………四八四
律照大徳の詠草お……………四八八	智乘尼の詠草お……………四八九

疑年山論……………幸文……………四九〇

初入の門人に示す……………紀成……………四九二

千代の古道の一節……………知紀……………四九四

贈勝安房守書……………知紀……………四九七

或問……………幸文……………四九一

蝦夷日記の中……………紀成……………四九三

敷島の道の考……………知紀……………四九五

答三浦千春書……………知紀……………四九九

隨所師說

一名詠草與書

香川景樹著
門人輯

○備中人高橋正澄の詠草に

幸文にも御逢の由、さらば委しう示したる趣の、聞き給ふらむかし。意をきて、調ぶる事、此道のかなめに侍る。御歌の變らず、あしうも侍らせ。猶みまのあたりを願ふのみ。去ひて申さば、御歌力入り過ぎたる方侍るべし。今少しさら〜と有たくや。御よみくづの御歌こそ見まほしく侍りけれ。已れよしとせる歌の、必全きものみあらざる。かしお。

○同じ人の詠草お

點をらしたる御歌、みな聊う此事おて、是をそれとほまむかを侍らぬ。つと〜書つ^{めい}多侍らば、まふいはれざるにも侍らねど、勞の之まも侍り。又そま申し侍りしとて、さる甲斐あるも此おも侍らず。唯大やう此處茂、今少し此おみ給と〜と思を侍り。とかく歌といふものお、から免られたる所はま侍らせ。聊のを巧む意侍りて、とき歌のなき

を此といふ事をささるゝ、此道此至りに侍るべし。扱も古人乃よた歌之。去り涼しく巧
をとされたるも乃おとあらせやと思ひ、甚しきり、人丸を巧をまぬかまらずなどやま人を侍
り。夫と以まご歌此至里を知らぬ侍り。去りいと、神代を巧技まぬかれとといひてか
なふべし。天巧と人巧と見え侍らぬて、中々おそを論あるべし。却て天巧を以るべし、
高遠おは去る意と覺ゆらせかし。さらおさる事あらせ。此坐を動かぬ所やがて天巧之。た
とへん人と語るお、取つくりひて云なし、心づりひ去らむと、ある去らむをなく、打出
るおまかせると、いづまかぬとまはるはしく聞え侍る。かへなきがとたと論なく侍
るなり。されを心あひ此友をバ戀去事侍り。又かこりたるイ、ある哥のうるはしとて、所謂四方お使去
て專對するが、束帯去て賓客と語るをま此姿おて、今歌此上お云ふうると去をわらず。
あるうるはしとて此道おのいむべを此之。思無邪此うらうへなきとて。斯くいひもてゆ
まバ。扱ひ誰を心えたる事なり。おと新らしくやいと、皆お事侍まど、誠お此事心お
至里の終おて侍り。さなりと思ひとらバ、など頓て歌此上おのうはさいらん。おのまを
きは日、眞淵翁此おひまなびを見て、ことごとく書きくはるるも此侍り。うはせせて參
らばべし。其心おろく書は多て侍り。かくおまをく、去くり申侍まど、おのまをえたるお
のあらせ。只おま言をとり給ふを。おればうり此事の、幸文もうまく意得て侍り。語る

に此外なまれば。ゆきと幸文もイナシ此れをえて歌をを事と、も空よりあらぬ事お侍まど、いぬ事の云べきあり。屢々どひ聞給ふべし。此頃古今はどき此よし承り侍り。そまよた御稽古あり。まゝして古人乃意我露もまほけ給はば、頓ツイて歌まかどり侍る慮し。又古今お面白き思ひよりを侍らば、申しおしたかせ給へ。幸文よりも講案たふりて、大衆に心えさる事少なをら老侍るこ。

世此人此まどひと、歌をみえたまと思ふより違をゆく事おみえ侍り。見得ありとを、取えぬの何此益の侍らま。せめて云へば、みまとも取得あらむの、とりを直ゆず道をねさる人と云べし。いま爲學ばまどゆふとも云々此心ばへあり。さ空へを梢花をよく見たりともみたるばのりの已が物おあらま。よし見る事の疎く空も、折えたらんのお乃のおも此こ。ゆきば花景我いふ事をやめて、手我のくべきかをひはあり有るべた事お侍り。見て後、手我もふるべ我お侍まど、見さる我已ごと思ひ誤まるるお多く侍まば、見まとも手おてと申まに侍り。さるまかさと名と利とお妨げられま、此誠我おしとほるお侍る慮し。誠の萬物此基本に侍まを、なごう歌此ま此益我なまて、どいまり侍るべた。さまを此道此いさを我ば、古人も溫柔敦厚恥ど申侍りて、人おらも化する事に侍るとり。今の哥よみ出て後、たあぶり、或の實我失ひ、或の争ひなど屢々見たく所お侍り。甚まきの道おより始心我ゆき、

ことごとく玄に争ふに至るなど、道此魔之空申さべし。この皆其をどのみたるを得るに思ひたゞの處るよりに此あやまち也と、お此まの思ひ侍る之。いつるおまかせて書ながし侍り。病筆如何みえ申すまじく、どらく對め乃時該まち侍るの之。あかうしこく。

五月十九日

景

樹

高橋令兄

玉机下

○又同じ人お

日記此御歌の、みぢ面白く承り侍り。文のヤを旨少からせ。われど筆して申さる限おを
あらねば扱おき侍り。時有て對面此談を待ち侍り。大よそ強うさば、飾まる方乃がれせや
空し侍らむ。人おをせん聞うせん此心を捨て、情の行く儘のい付てかへりま給とば、事
状いよゝあふとめて、お乃づから文意文跡と、此以侍る處し。源語枕草子などおとるの、
あらぬ事之。題詠の遙にわくまで聞え侍り。さと實景實事あらねむなどやせかさも侍れど、
ゆるべきおほらせ。題詠の題詠の實情以のて無からむ。題詠も實景此如くあれをいふおの
非也。題詠に違ふ所あまば、實景おをひそのお差ふ所あるを知る。其實景をともく、お見
侍らねば、的論の盡しがさし。空かく御歌眸なき像此心地し侍り。歌を文を古歌古文を捨

て、我歌我文を書き給ふべし。自然古歌古文に似るを此出来ぬ。似るを願ふ所ら。近世古歌或ると歌をとむ空同じ心得を惑ひさるるとり、古此跡を
みる乃學侍る。爰に至りては、已達此高評を聊う謬まるぬしなれ侍らねば、その論ひ
くさく煩らと玄く侍るのみ、ま此あさ一喝申し入れ侍らば、氷此如く打どけ侍るを
空覺え侍り。

○信濃人丸山弼が詠草

其御地風雅人、大かた狂歌お落入る事なげき、おの餘り惜むる事に侍ら。狂歌にお
もて歌に似たといへども、裡の水火此違ひ侍るを此之。此譯之論長けまば筆お申し侍ら
。ゆづ故に狂歌師此よく歌とむと絶てなれ。又歌人此狂歌よくするもなれ。ままばも
ととて歌此道お志ある者、かりおも狂歌に入るべうら。狂歌に心ある者の、ゆかにまとも
歌おのま、まざる。それを狂歌此みあらむ里ならば、歌ある事を知らずともすすべし
其ゆゑさりと、昔より此道行とれ侍る。ゆるを捨て狂に入るの自らなせ禍と云べし。
止むともとまるべけむや。としとまるを其胸くちたるも此之。更に惜むに足ら。ざるを
無理お引入れいへば、お此が不得手取るま、かへりて歌を此る事少からぬ例など。
道に誣べらる侍り。又寒郷にまての景樹がゆき處繼うけ侍る人出来がたはとて歎息、

こそ見り侍まども、あるの都も更に有べくも見え侍らねば、その都鄙のいかゝる所お侍らせ。是の歌乃上手下手おをよらず、又賢不肖にもよらせ。唯誠乃志此みにて、寢鳥を射るよりこやすき事うと思ひ侍り。あるの歌我よくよみ、ましてさかまくも侍らば、たよりのあまのらじ。さまど其輩の敷多まえ侍まど、景樹がアすよき歌を中を處甚得がふし見え侍り。おと得難さおあらず。向ふ所乃違へる此ま。寔に膝下此黄金お侍り。か乃淺葉乃大會を、心よく侍るべし。又ひとり膝下をゆぐらんを遅くらじ。唯心お得給は、此道に師なれ事を知り給ふべし。只心ながた我祈り侍り。とてもいたる程の生侍るなまば、其限かいつらひ給ひ、生涯此樂地を得、又願えずして千載不朽此名も立ぬべし。また今はやる俳諧と申すもの、狂歌此たぐひに侍らぬえ。此者流を引入れてよし。お其心ばへ歌をたがぬをのみなま。芭蕉が、歌の貫之躬恆の上にて、とてを出處からずと云し之惜むべし。若貫之躬恆に猶數年をうさば、古今此ふまを歌、愈々よと出らるべし。さらむ其とみ餘りあるにわらずや。この唯おどわりを云此ま。さるまでもかく、己がいふ俳諧やぶてさるゆゑひに近きをなござりし。近く蕪村といふ俳人も、猿丸大夫乃奥山の歌を人お示きて、歌のかく面白かたぬ唯あり此も此。いづくにう風味あらずを譏りし。是今此世此歌人此及ぶ所おあらせ。後世乃卓見と云ふ。歌といふは、みやびたるものとて、

猥りふたふとむやのら此知る所に侍らぬ。其味ひなきが味ひなる事、米水此如きを去ら
去染バ、直ちふよ程此歌人となるべありしなり。芭蕉おても、蕪村にても、一棒くはせ
侍らバどを去む事お侍り。今かく云ひ狂歌哉去りぞけ侍りしおつけて、俳を同じく思ひ
給とむうと、聊うかはる處哉、ついでお示し侍るを此取り。

○信濃人たまくの詠草お

若菜かふる何處のあまど春乃日此名にかふ野邊に行て摘まし

春此日此名おたふとい、春日野此事おや。とる日野といといこそ、春此日此云とも云べ
けれ。文字おとて名おかふとい更に以ひれなくや侍らむ。

軒ちうた井筒おかよふ道をだお拂ひうねたるけさ此ゆきのな

かくての道を雪おはらひ兼たる空云お聞ゆる。さることお有まじさか故おはの聞侍ら
ねど詞乃正當えかな。聞てをらひての歌お非せ。以やでもたうでも聞する道なり。正的
からざれば感應のな事事に侍り。平語おかゝる前後の違ひの侍らぬ事。今朝乃雪哉とら
ひ兼たると續のねバ順ならせ。

道おかき雪おふる日の旅おるも云々

すべて世に只旅といひて有べを、旅衣云々といふ事、中世よりはやり侍り。更に有まじ